関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

[文献紹介] 野村幸正著『関係の認識 : インドに心理学を求めて』

著者	中城 進
雑誌名	教育科学セミナリー
巻	23
ページ	95-95
発行年	1991-12-15
URL	http://hdl.handle.net/10112/00019481

文献紹介

野村　幸正　著

『関係の認識－インドに心理学を求めて－』

ナカニシヤ出版（1991.10.10.）

私達は近代社会の中で、また近代公教育という枠組みの中で、様々のことを学び、そして知りつつ生きている。このような学びの形態は“公的領域に住まう私”の学習である。近代公教育制度の中で教育なるものを享受する者には、学ぶべき事柄や知識がその学び方や教授の方法とともに既に決定されている。そこでは、誰もが同じ学習の体験・経験を行なう。それは、他者と代替可能な部分の私の学習であり、厳密に言うならば“私”自身の学習ではない。つまり、その学習は限りなく匿名性を帯びた学習であり、またその学習は匿名的な自己を形成する。厳密な意味での、個人的で、私的な学習の体験・学習ではない。その学習は、“私的領域に住まう私”の学びではないし、“私的領域”自己の形成でもない。“私的領域に住まう私”を欠く心理学や教育学や哲学、科学観、世界観は真のものを把握しきれていない。つまり、私達は、私的意味の剝離した秩序・構造の中に解消される人工的な知識を習得しているのであって、生身の人間や現実を見失っている。

書評者としての私自身の思考の枠組や知識から解釈しますと、著者は、このような問題意識に基づいて、“私的領域に住まう私”の学びを、また“私的領域”の自己の形成を明らかにしようとしておられるように思われます。というよりも、“公的領域に住まう私”の学習と“私的領域に住まう私”の学習とにおける、総合的な理解を前提としておられるのかも知れません。そしてまた、従来の心理学は、人工的で、象徴的な世界を構築しようとして来たばかりで、私達ひとり一人が現実に生きている、現実の生の世界の把握をし損ねて来たということに批判を強めているように思われます。

『関係の認識－インドに心理学を求めて－』は、著者がインドにおいて自らの生を、自らの専門を問い直し、そこで熟考し省察したものを言葉に書き表そうとしたものです。何故に、著者はインドに心理学を求めたのか。近代社会から遠くかけ離れたインドという大地を、今まで著者が習得して来られた近・現代科学の対象や方法や知識をいったん自らから切断を行う場所として選んだのではないか、と私は推測します。そして、自らの感性を高める場所としてもインドを選ばれたのでしょう。

『関係の認識』におきましては、著者が心理学の専門家であるのにもかかわらず、様々な領域の考え方や言葉が出て来ております。他方面の、専門的な用語がたくさん出て来るのでびっくりしてしまうかも知れません。このことは、著者が“生きることは何か”、“心とは何か”、“制限を受ける心とは”、“共感とは、構想とは”という、人間にとっては極めて根源的な問いを解きほぐそうとしているからなのです。生の実感を伴いながら生きること、主客未分の一体化、制限された心の解き放ち、共感や実感による理解……このような問題の立て方は、近代化・産業化された社会によってまた近・現代の教育によって矮小化された生に対しての異議の申し立てであるのです。　　（中城　進）